

派遣者番号	31K05	氏名	小宮山 香織
研究主題 —副主題—	「情報の扱い方に関する事項」に着目した説明的文章の単元開発		
派遣先	帝京大学 教職大学院	担当教官	小山 恵美子 魚山 秀介
所属	多摩市立大松台小学校	所属長	水野 裕司

キーワード：物語文と説明文の関連教材 論理的思考力 読解力

1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

人工知能(AI)の飛躍的な進化に伴い、今の児童たちが成人して社会で活躍する頃には、雇用の在り方も大きく変化するであろうと予測されている。新井(2018)や文部科学省は、Society5.0に向けて児童たちに読解力をつける必要があると主張している。

また、「PISA調査」、「全国学力・学習状況調査」、「東京都児童・生徒の学力向上を図るための調査」からは、説明文の読解では、情報の整理・関係付けや考えの形成などに課題があることが明らかになった。

そこで、本研究の目的は、新学習指導要領より新設された「情報の扱い方に関する事項」について調べ、小学校国語科の説明的文章を教材とした単元開発を行い、授業実践を通して効果を検証することとする。

研究の目的にアプローチするために、以下の三点の課題に取り組むこととした。

- ①基礎研究
- ②実践に関する先行研究の整理
- ③単元開発と授業実践

2 研究の内容・研究の方法

(1) 基礎研究

基礎研究では、国語の指導に関する課題や「情報の扱い方に関する事項」が新設された理由等について調べた。

新学習指導要領に新設された「情報の扱い方に関する事項」は、「学習の基盤となる資質・能力」に位置付けられた「情報活用能力」の基盤となる「言語能力」の育成を目指し、発達の段階に応じて系統的に育成されるよう新設されたものであり、論理的思考力の育成が目指されたものであることが明らかになった。

そこで、本研究においては、小学校の「読むこと」の指導においての論理的思考力を、「文章を読んで理解したことに基づいて考えを形成することができること」と位置付け、研究を進めることとした。

(2) 実践に関する先行研究の整理

情報の扱い方を身に付けるための実践の多くが、教材文を通して学んだことを基に、自分の課題について関連図書で調べてまとめて発表するという学習の流れであった。

また、『アップとルーズで伝える』を教材文として扱った実践の多くは、文章の内容理解にとどまっており、考えの形成や活用の視点が薄いことが課題であると捉えた。

(3) 仮説の析出

基礎研究、実践に関する先行研究の整理から、「情報として可視化したり、他の情報と関係付けたりするような学習活動を行うことにより、筆者の伝えたいことを理解したり、読み解いた内容をさらに深めたりする(情報の受け手としての資質・能力を育成する)ことができるのではないか。」という仮説を析出した。

(4) 単元開発と授業実践

基礎研究、実践に関する先行研究から、以下の三点を取り入れた単元を開発した。

- ・「情報の扱い方」を知識・技能として習得し、児童が日常的に活用できるようにすること
- ・文章の内容を理解することにとどまらず、読んで考えたことを生活で生かせるようにすること
- ・調べ学習のような長い単元ではなく、児童も教師も取り組み易い短い単元構成にすること

単元名：「情報を受けるときの心得を考えよう」

対象：小学校第4学年

教材名：主教材『アップとルーズで伝える』(光村図書 四下)

副教材『空からのぞいた桃太郎』(岩崎書店)

『桃太郎が語る桃太郎』(高陵社書店)

「情報の扱い」の指導として、次のことを行った。

- ①「詳細な読み」から「情報読み」へ転換する。
- ②「比較」、「分類」の思考を可視化する。
- ③「事例」と「考え」という関係について理解する。
- ④情報と情報を結び付けて自分の考えを形成する。
- ⑤自分の知識や経験と関連付ける。

3 研究の結果と考察

(1) 児童の変容と考察

全児童のワークシートの記録と抽出児童の様子から授業を検証し、考察した。なお、抽出児童は、日常的に「読むこと」に苦手意識があり、自分の考えを表現しにくい3名とした。結論から言って、抽出児童3名とも「情報を受けるときの心得」を考えることができた。それには、以下のような手だてが有効であった。

① 読む過程を可視化すること

根拠をもって考えることが苦手な抽出児童3名であったが、自分の考えの根拠を線をつなぎながら可視化して思考したことにより、根拠を明らかにしながら自分の考えを形成することができていた。このように、まずは線をつなぐ等、言葉ではない表現で自分自身が認識できるようにし、徐々に言語化できるような段階的な指導が有効なのではないか。また、可視化により、友達の思考の過程も明らかになるため、学び合いがしやすくなり、協働しながら文章の内容を理解することにもつながった。

本単元では線をつないで情報と情報とを関係付けるという学習活動を2回繰り返して行った。1回目は関係付けができなかった児童も、2回目はできるようになっていたため、情報の関係付けを繰り返すことの有効性も明らかになった。

② 文章の内容と経験とを関係付けること

抽出児童は、ルーズ視点の『空からのぞいた桃太郎』を読むことを通して、『アップとルーズで伝える』の学習に立ち戻って、遠くから見た方がよく分かることについて実感を伴って理解することができた。この体験により、『アップとルーズで伝える』を深く読むことにつながった。抽出児童のような読むことが苦手な児童でも、文章の内容と自分の経験とを関連付けることで、文章を理解しやすくなることが明らかになった。

また、読むことを得意としている児童は、情報を関係付けることも得意であることもワークシートの記述や授業中の様子から見られた。

(2) 仮説に対する結果

授業実践によって仮説を検証した結果、筆者の伝えたいことを理解したり、読み解いた内容をさらに深めたりするには、次の要素が重要であることが明らかになった。

- ① 文章から情報として取り出したり、情報と情報とを関係付けたりする思考の流れを可視化すること
- ② 文章の内容を自分のもっている知識や経験と関係付けること

4 本研究の成果

本研究の目的は、新学習指導要領より新設された「情報の扱い方に関する事項」についてどのような指導が求められているのかを明らかにし、小学校国語科の説明的文章を教材とした単元開発を行い、授業実践を通してその効果を検証することであった。

新学習指導要領より国語科の知識及び技能に新設された「情報の扱い方に関する事項」について、以下のことが明らかになったことは一つの成果である。

- ・新設の経緯
- ・育成を目指している力
- ・「思考力・判断力・表現力等」との関係
- ・どのような指導が求められているか
- ・令和2年度から使用する教科書における扱い
- ・指導方法の提案

また、説明的文章の指導の中で、説明的文章の内容の理解を促す目的で文学的文章を関連付けた結果、「読むこと」が苦手な児童にも効果があることが分かった。私は、これまで説明的文章と文学的文章を関連付けて指導する実践を見たことがなく、また私自身も行ったことも考えたこともなかったが、説明的文章と文学的文章と分けて指導していたものを関連付けることで、有効に働くことがあるということを示唆できたことも本研究の成果である。

5 今後の展望

本研究では、情報の扱い方という段階的に積み上げ、論理的思考力を育てるための知識・技能を扱った単元開発を行った。児童が情報の扱い方を習得するには、領域を超えて活用し、繰り返し指導することが必要である。本研究では、国語科の一単元の実践しか行っていないため、他教科・他教材でも情報の扱い方に関する指導を実践して、その効果を検証していく必要がある。